

## SY5-1

大学病院での小児看護の実際  
～病棟と外来を通して子どもの育ちを支える～

高梨 都

鳥取大学医学部附属病院 小児総合病棟

筆者が所属している小児総合病棟は、内科系疾患、外科系疾患、脳神経疾患など様々な疾患をもつ患者が入院している。患者の年齢は生後1ヶ月未満から40歳台までと幅広い。

当院は外来病棟一元化であり、各診療科の該当病棟に所属している看護師が外来勤務も行っている。小児総合病棟からは、小児科外来と脳神経小児科外来の2ヶ所に看護師が出ている。

筆者が担当する外来は小児科外来であり、受診する患者は内科系疾患をもつ患者が中心となる。同じ看護師が外来と病棟での勤務を通して子どもやその家族と関わることにより、外来では行うことが難しいコンプライアンスの悪い患者の内服指導や生活指導を病棟で行うことができたり、病棟での指導内容を外来で継続することができている。また、先天性心疾患や慢性呼吸器疾患などの慢性疾患で医療処置が必要な患者へは、自宅で安全に過ごせるように入院中に指導されたケア内容で問題なく療養生活を送ることができているのかを確認したり、退院支援看護師やソーシャルワーカーとも連携しながら患者、家族が地域で安心して過ごせるように関わることもできるなど、当院が実践している外来病棟一元化は患者のケアを考えるとメリットは大きいと考える。

近年、小児期医療の進歩により小児慢性疾患をもちながら成人する患者が増えており、思春期から成人に変わるタイミングでの移行期支援が注目されている。当院でも様々な事情で成人しても小児科を卒業できない患者が多いため、成人診療科への移行を目標とした関わりや、移行できない患者も患児自身が自立して自己管理が行えることを目標に成人移行期支援を始めている。このように様々な状況に置かれている患者が健やかに成長していけるように、家族も含めた支援をしながら今後も関わっていきたいと考えるが、当院の成人移行期支援に関してはまだ始まったばかりであるため具体的な成果を示せるのはこれからというのが現状である。

今回のシンポジウムでは当院が実践している小児看護の実際を紹介するとともに、実践内容のメリットやデメリットあるいは更なる看護の質の向上に向けた改善策などについて参加者の皆様と討議できればと考えている。